

『古今俳諧明治五百題』について*

鈴木円花(学籍番号 200821660)

研究指導教員:綿拔豊昭

1. 研究背景・目的

『古今俳諧明治五百題』は、明治 12 年に下総の俳諧宗匠である東旭斎によって編集され、当時の旧派の有名宗匠、橘田春湖・三森幹雄がその撰に関わった類題句集である。本書は研究が進んでおらず、『俳文学大辞典』などにも立項されていない。しかし、本書は巻末に人名録が付されており、収録された句を詠じた俳人の氏名や住居を知ることができる。また、同様に巻末に付された発行書林の一覧によって、この書が扱われた書店を知ることができる。さらに、明治 14 年には同書の「続編」、明治 17 年には「続々編」が、同じく東旭斎によって編まれており、当時、この書の需要が高かったことがうかがえる。以上のことから、『古今俳諧明治五百題』は、明治時代前半の俳諧・俳人を研究する上での基礎資料といえることができる。

本研究は、これまで部分的にしか取り上げてこられなかった『古今俳諧明治五百題』の全体像を把握し、本書が明治時代初期の俳諧文化研究において、貴重な資料であることを明らかにする。

2. 編集者と選者

2.1 東旭斎 / 編集者

東旭斎は、文政 5 年に下総香取郡の農家に生まれた。同じ下総出身の丁知、後に江戸の由誓に師事。地元を中心に朝日社と称する一門を率いたという。明治 30 年 7 月 5 日、76 歳で死去。

2.2 橘田春湖 / 選者

橘田春湖は、文化 12 年に甲斐国に生まれ、はじめは嵐外の門に入り、後に江戸に出て禾木に入門。全国を行脚して名声をあげ、俳諧教導職の任にも就いた。等裁・為山とともに江戸三大家と称された。明治 19 年 2 月 11 日、72 歳で死去。

2.3 三森幹雄 / 選者

三森幹雄は、文政 12 年、陸奥国石川郡に生ま

れた。江戸に出て西馬に俳諧を学び、明治 6 年には明治政府によって俳諧教導職に任命された。俳諧結社である明倫講社を設立、門弟は 3000 人に及んだという。旧派俳諧の中心的存在。明治 43 年 10 月 17 日、82 歳で死去。

3. 成立背景

3.1 旭斎の手紙

東旭斎が秋田の俳諧宗匠である庄司唵風へ宛てた手紙から、本書の成立過程をうかがうことが出来る。この手紙により、出版経費が 300 円で当初「千題集」として企画されていたことや、もともと旭斎一人に依頼があったところに途中から春湖、幹雄が参加したこと、旭斎が唵風に直接句を依頼していることなどが明らかとなった。また、詳細な手紙の内容は、旭斎と唵風の親交を示していると言える。

3.2 募集ちらし

旭斎の手紙には本書の募句ちらしが付されており、募集の際の様子が分かる。このちらしにより、投句料、投句方法、募句の締切日、出版予定日、本書の定価などを知ることが出来る。

4. 諸本

『古今俳諧明治五百題』の諸本は、表 1 の図書館等で確認することが出来る。

表 1 各所蔵機関の諸本比較

図書館	巻	刷
国立国会図書館	上下	初
天理大学附属天理図書館	上下	四
俳句図書館鳴弦文庫	上下	三
弘前市立弘前図書館	下のみ	三
三康文化研究所附属三康図書館	上下	二
成田山仏教図書館	上下	三
浜松市立中央図書館	上下	四
静岡大学附属図書館	下のみ	四
小笠泰一 A	上下	初
小笠泰一 B	上のみ	四

* A Study of “Kokonhaikai-meijigohyakudai” by Madoka SUZUKI

これらの諸本調査の結果、本書には初刷から四刷までであることが明らかとなった。特に人名録の差異から、二刷から三刷において大幅な改訂が行われていることが分かった。また、広告の差異から、さらに2種類のパターンを見出すことが出来た。

それぞれの刷の明確な発行年次及び部数は不明であるが、刷の数と広告の差異から、本書は少なくとも3回の刷り直しが行われており、現在6種類のバージョンが存在していることが分かった。

5. 構成

5.1 本文の構成

『古今俳諧明治五百題』の本文は、「歳旦之部」、「春之部」、「夏之部」、「秋之部」、「冬之部」、「遅来追加四季混題」、「開化之部」、「詠史之部」、「名所神祇哀慶旅中之部」から成る。それぞれの部には題が配されており、その題について詠じられた句が掲載されている。全体の題数は1269題、句数は5976句である。

5.2 収録句数の多い俳人

俳人ごとの句数を集計し、本書における有力俳人を割り出した。その結果、編集者の旭斎が最も多く、351句であった。また、次点は秋田の俳諧宗匠の庄司唵風で、124句であった。そのほか、上位の俳人は辞典に立項されている宗匠達が多く見られた。それ以外は下総の俳人が多く、下総出身の旭斎の門人か、あるいは地元の名士であると考えられ、旭斎の影響が強く表れていることが分かった。

6. 人名録

『古今俳諧明治五百題』に後付として付されている人名録は、本書に納められている俳句の作者の俳号、住居、氏名を、俳号のいろは順に並べたものである。この人名録に挙げられている俳人は、全821人であった。

これら俳人の地域分布を調査した結果、41の地域に及んでいた。そのうち最も俳人数の多かったのは下総の273人である。以下人数順に、信濃162人、常陸59人、羽前46人、東京41人、上野40人、越中39人、伊勢23人と続く。下総と信濃だけで全俳人の半数に及び、地域的な偏りが見られた。下総は旭斎の出身地であり、信濃は旭斎が宗匠としてよく赴いていた地である。人名録からも旭

斎の影響が見られることが分かった。

7. まとめ

『古今俳諧明治五百題』は旧派の宗匠が編んだ類題句集である。そのためか活版ではなく木版刷りの和装本で、一部に改訂・増補がなされても刊記についてはもとのまま使用され、明治12年刊とされてきた。しかし諸本を調査した結果、本書は第四刷まであり、少なくとも3回の刷り直しが行われていることが明らかとなった。また、本書は企画や句の募集、編集などについて詳細に記した手紙やちらしが残されており、その成立の過程や背景を知ることの出来る貴重な資料であるといえる。

さらに、本書の刊行には有力宗匠であった橘田春湖と三森幹雄が関わっており、当時でも珍しく「開化之部」が設けられ、春湖や幹雄が担っていた俳諧教導職に関する題も取り上げられている。これは、時代を反映する事物を取り入れた句集として、注目に値する。しかし同時に、本書の人名録に見られた俳人の地域分布は下総と信濃に偏りがあり、編集者の東旭斎の影響が強く見られた。また、俳人ごとの収録句数は旭斎の句が最も多く、次いで本書の成立背景にいた庄司唵風の句が多く採録されていた。成立背景を記した旭斎の手紙のことも考えると、本書の成立には旭斎一人が深く関わっていたことが分かる。

明治時代初期の旧派の俳諧については、詳細な研究がほとんど行われていないのが現状である。本書は当時の俳壇の様相をあらわす資料として注目すべきものといえる。

文献

- [1] 越後敬子. “明治期旧派類題句集概観”. 明治開化期と文学. 国文学研究資料館編. 臨川書店, p.145-187. 1998年.
- [2] 勝峯晋風. 明治俳諧史話. 日本図書センター, 1984年. (吉田精一監修. 近代作家研究叢書, 45).
- [3] 加藤定彦. 教導職をめぐる諸俳人の手紙—庄司唵風『花鳥日記』から—. 連歌俳諧研究. 88, p.47-56. 1995年.
- [4] 河合章男. 明治期の俳書・俳誌の研究. 筑波大学, 2006年. 博士論文.